

1 作 物

| 項 目 | 作 業 内 容 |
|------------|---|
| (1) 麦の栽培管理 | <p>(今月の作業管理のポイント)</p> <p>(1) 麦の栽培管理</p> <p>(2) 水稲の育苗準備</p> <p>1か月予報（1月15日高松地方気象台発表）では、気温は平年並か低く、降水量は少なく、日照時間は多い見込みである。</p> <p>ア 土入れ、麦踏み</p> <p>この時期の土入れと麦踏みは、無効分げつの抑制や倒伏防止などの効果がある。11月上旬～中旬には種したほ場では2月中旬頃に茎立ち期となるので、それまでに土入れや麦踏みを完了する。土入れは、跳ね上げロータ付き管理機等を用いて土を跳ね上げる（写真1）。排水溝の補修効果による湿害防止対策にもなるため積極的に実施する。</p> <p>今冬は12月の気温が平年より高かったことから生育がやや旺盛であり、また、12月以降は少雨で土壤が良く乾燥していることから、過繁茂の抑制や根張りの向上のために積極的に麦踏みをする。麦踏みは、鎮圧ローラ等で行う（写真2）。ただし、降雨で土壤が湿った状態のときは土壤の乾燥を待ってから行う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"></div> <p>写真1 土入れ</p> <p>写真2 麦踏み</p> <p>イ 雜草防除</p> <p>気温が上昇すると雑草が繁茂し始めるので、雑草の葉齢が若いうちに、占有草種に効果のある除草剤を散布する。</p> <p>複数の草種が発生しているほ場では、一年生広葉雑草とイネ科雑草に効果があるハーモニー剤が比較的有効である。ハーモニーDF水和剤の散布適期は、スズメノテッポウでは5葉期まで、カズノコグサでは1～3葉期であり、時期を失しないように散布する。</p> <p>広葉雑草が発生した時は、広葉雑草が2～4葉期で麦類の収穫45日前までにエコパートフロアブルを散布する。</p> |

| 項目 | 作業内容 | | | | | |
|----|--|--|--|--|--|--|
| | <p>ウ 穂肥、追肥</p> <p>出穂期は11月上旬まきのハルヒメボシ、チクゴイズミ、シロガネコムギでは3月下旬である（表1）。この場合、穂肥の施用時期は、出穂前30日の2月下旬頃となる。11月中旬以降のは種では、いずれの品種も出穂が3月下旬～4月上旬以降であり、穂肥は2月下旬～3月上旬に行う。出穂前30日の幼穂長は5mm程度であり、幼穂長を目安に判断することができる。出穂時期は今後の気温が低く推移すると、予測よりも遅くなる場合があるため、今後の気象動向や幼穂長を参考に穂肥施用時期を決定する。</p> <p>穂肥量は、N K化成で10a当たり窒素成分3kgを基準とするが、中間追肥量や生育状況及び葉色により加減する。</p> <p>なお、12月は種のほ場では、中間追肥として2月中旬までに窒素成分で10a当たり2kgを追肥する。土入れ作業と併用すると効果的である。</p> | | | | | |

表1 麦の穂肥時期予測（1月25日予測、松山）

| は種期 | ハルヒメボシ | | チクゴイズミ | | シロガネコムギ | |
|-------|--------|----------------|--------|----------------|---------|----------------|
| | 出穂期 | 穂肥時期 (-30日) | 出穂期 | 穂肥時期 (-30日) | 出穂期 | 穂肥時期 (-30日) |
| 11/1 | 3/18 | 2/16 | 3/24 | 2/22 | 3/27 | 2/25 |
| 11/10 | 3/23 | 2/21 | 3/29 | 2/27 | 4/1 | 3/2 |
| 11/20 | 3/29 | 2/27 | 4/4 | 3/5 | 4/7 | 3/8 |
| 12/1 | 4/4 | 3/5 | 4/10 | 3/11 | 4/13 | 3/14 |
| 12/10 | 4/8 | 3/9 | 4/14 | 3/15 | 4/17 | 3/18 |

注) ハルヒメボシの出穂予測日は出穂予測プログラム（農林水産研究所）により算出。チクゴイズミ、シロガネコムギの出穂予測日は過去の所内試験データを参考に算出。

(2) 水稻の育苗準備

ア 用土

水稻の育苗では育苗用土のpH調整が重要である。育苗時のトラブルは用土に起因することが多いため、次の点に注意しながら準備を行う。

用土は無病で、通気性や肥料持ちが良くpHの低い壤土や砂壤土が望ましいことから、山土や粒状培土を用いる。

用土量の目安は、10a当たりの苗箱数を18枚とすると、山土は床土と覆土で70～90ℓ、粒状培土は40～45kg程度となる。

好適pHは4.5～5.5で、pHが高いと苗立枯病の多発要因となるため、硫黄華等で矯正する。100kgの土のpHを1下げる硫黄華の量は壤土で80g、砂壤土で60g、pHの矯正には約1か月を要するため早めに調整しておく。なお、pHが低すぎる場合はもみ殻くん炭等で矯正する。

| 項目 | 作業内容 |
|----|---|
| | <p>イ 種子更新</p> <p>自家採種した種子を数年使用すると、混種や交配及び変異により、品種本来の特性が発揮できなくなり品質や収量の低下を招くため、3年に1度は必ず種子を更新する。</p> |

(作成 農林水産研究所)